

いきなり！体重測定



石山 絵歩

「どうして私の機密情報を教えなければならぬの」——。7月末、南太平洋の島国ツバルへの出張から帰る時のことだ。

乗り換えで利用したフィジーの空港でチェックインのために並んでいると、少し前に並ぶ大柄の女性が航空会社の人もめていた。搭乗者は全員、荷物を計量する器械で体重測定が必要だという。女性は断固拒否の構えを見せた。

私は行きも同じ航空会社を利用したが、このようなことはなかった。隣にいた米国人男性も初体験だとし、「年齢と体重を聞くのはやばでしょ」とつぶやいた。これには、過去に同じような「抜き打ち検査」を経験したというドイツ人男性が応じた。「料金は一律だ。体重が基準を超えるなら、荷物か体をシェイプアップするか、追加料金を払うのがフェアだ」。ただ今回は、体重によって追加料金を求められるわけでもなく、目的が不明だった。

世界では今年、ニュージーランド航空と大韓航空が、搭乗者の体重調査を実施した。定期的な調査デー

タを基に平均値を割り出し、飛行中の機体を平行に保つことや、必要な燃料計算に役立てられる。飛行機は通常、予測される燃料にその約1%を加えて離陸するという。搭乗するすべての人の体重が正確に分かれれば、無駄な燃料をカットできる。

燃料の削減は、気候変動対策にもつながるだろう。一方で、公共の場で体重測定を求めることが、体形を気にする人たちを追い込む危険性を指摘する声もある。生まれてこの方、身長に応じた平均体重曲線を上回ってきた私としては、この指摘に同意する。体重を知ること自体が嫌だ。自己申告制ならば、悪気なく理想体重を記入してしまうかもしれない。

結局、私の帰りの便の搭乗者は全員がこの計測を受け入れた。搭乗を待つ間、もめていた女性に話しかけると、「体をスキヤンすれば自動的に体重がコンピューターに入力される仕組みの開発を航空会社に助言した」と息巻いた。近い将来ありそうな仕組みだが、勝手に体重を知られるのも嫌だと思う。そう伝えると、彼女はこう返してきた。「私は普段ポンド表示の体重計を使っている。さっき、体重がキロで示されて、重くなったのかよく分からなかった。知らなくて幸せなこともあると思わない？」